

# 方向

第一〇五号 一九八九年一〇月二五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

奥大 香 落

1989.10.5-10. 赤谷紀美子

金木犀の香がかすかに漂いはじめました。方向一〇四号、それにお手紙までいただきまして有難うございます。「めぐりあい」のお話、先生の小さい頃や、禹雄様のこと、森田（曠平）先生のことなど、私の知らないことがたくさんあって、あらためて皆様の生き方に感動いたしました。「めしいのひじり」のことも話していただき、何もかもめぐりあいかと存じます。お話を聞かれた方々も、きっと、私と同じ思いを抱かれたことでしょう。

先日、二十八、九日は、（奈良市五条町）西方院へ住職・石田智円様の車で、奥様へ石田夫人と八幡市の（義妹・樋崎）まさえさんも加えて四人で、奥香落へおくこうちへ行ってきました。

主人が逝った（一九八六年九月一八日の）一ヶ月ほど前の八月十一日、（主人と）郡山への墓参の帰り、買ってきた池の鯉十匹きをふら下げて西方院に寄りました。その時に、旅の話が決って、奥香落山荘に予約。それからの（主人の）急な入院。一週間で退院のメドもたらず、西方院様にキャンセルしてくださいよう電話したので。あれからまる三年が過ぎました。その奥香落へ、西方院様から、今年こそは行きましようとお誘いが、お盆の時にありました。このお誘いに甘えて、主人が亡くなってから初めて家をあげ、やっと一泊の旅をすることになったのです。主人の命日にお参りくださった智円様は、奥様からのおことづけと、奈良県東部の地図を持つ

てきてくださいました。また主人の教え子で古文化財の見学によく同行された木原様がお参りくださった時に、この話を見ると、大雨の中を城陽市の家に戻って、すぐまた大和高原や奥香落のパンフレットを持ってきてくださったのには驚き、感激しました。

旅先のことを調べようと、主人の書齋で本を探してましたら、奈良教育大学の池田源太先生著「第一集 歴史と大和の風物」「第二集 大和の土地と人」「第三集 大和とその周辺」の並んでいるのを見つけました。表紙をひらきましたら、扉に、第一、二集は「赤谷紀美子様 著者」三集は「赤谷明海様」と墨書されています。私はすっかり忘れていました。贈呈下さった物です。先生と主人とは知合いだったのです。ご一緒の方々に読んでいただこうと、池田先生の著書の中から「都祁の国」を、「古美術ガイド奈良」からも二、三、抜き出してコピーしました。おかげで、旅をする前から、楽しませていただきました。

出発の朝は雨でした。家を出ようと思つていますと、隣の高橋様のお嬢ちゃんがやってきて「ぬれるから荷物を持って駅まで送りますよ」といつてくれ、親戚への土産もあつて、重い荷物でしたのに、ほんとに大助かり。奥様は「気を付けて」と、門で見送ってくださいました。

車は西方院御夫妻が交替でじょうずに運転され、奥様の細かいだんどりや心くばりで、スムーズに時間が流れました。用意していった車酔いのお薬も飲まないままです。天理から桃尾の滝、天理ダムを見、私の母の里、菅原（ちさはら）に寄りました。十年ぶりに通つたこの道は、思い出がいっぱい詰まっています。それはまた、いつかお話することにします。

菅原の母が生れた家は、改築され、広い家の生活様式はすっかり近代的になっていました。智円様が仏壇にお経をあげてくださいました。いとこ夫妻のあたたかいてもてなしは、いつもと変わりなく、その息子のかわいいお嫁さんが「おばさん、また帰ってきてくださいな」と言ってくれてその気持がとても嬉しいでした。

ここでほうれん草の出荷までの作業の様子を見せてもらいました。ハウス栽培で収穫したてのほうれん草はいきいきして美しく、その葉を、一枚一枚裏向けて並べては束にし、「大和高原野菜」と記したテープでくくりまします。その繰り返しの大変さ、それを箱詰めにして、大きな冷蔵庫に入れ、翌朝四時に家を出て筒井の中央市場へ出荷します。私より二つ年上のいとこ夫妻が今も頑張っているのです。どつきりとじゃがいもや枝豆などを車に積んでくれて「今度は、ゆっくりと泊りがけでな」という声に送られ、さよならしました。

大和高原の都祁（つげ）村は、古代から人が住んでいたところ。都祁富士という美しい山があると聞いていました。山あいの菅原とちがって、明るく広い田んぼが続く高原です。菱の植わっている大きな池もあり、豊かそうな村。早くから開けたということがよくわかります。かつて主人と、菅原から足をのぼして、一度いつてみたいと話していました。小治田安麻呂の墓や来迎寺におまいりし、またここに住んでいるいとこの家にも立ち寄りました。菅原の弟にあたるのです。足を怪我して、いざりながら出てきたので、はっとしました。それなのに松葉杖をつけて、雨の中、いつまでも車に乗った私達を見送ってくれていました。

次は青蓮寺湖。その展望台で石田夫人の手作りのおいしいお弁当をいただき、お抹茶を、これも用意されたかわいなお茶碗でいただきました。お茶といえば、まさえさんも茶箱を持ってきていて、あちらこちらでお薄を点

てもらいました。なんと風流な旅でしょう。

香落溪（こうちだに）の景観を賞でながら、宿にきめていた奥香落山荘につくと、すぐ、西方院様のお知合いのお宅へお邪魔しました。仏様が坐しますような気高い兜岳（かぶとだけ）がすぐそこに聳えています。山を伐りひらいて家を建て、広い庭には、数々の山の草花を植えておられる元お医者様、気さくなあたたかい感じの御夫妻でした。主人と同じ辰年です。毎朝、兜岳に手をあわされるそうです。私もそうしたくなりました。いろいろと大切になさっている仏像やふるい品々、曹圃（そうぼ）へそにの村誌や地図を見せていただきました。村誌には、唐招提寺の寺領や法華院の茅葺のお堂、十一面観音像（現在は唐招提寺新宝蔵に安置）写真が大きく出ていました。

感動したのは、ここで、いけばな池坊の古書と出会ったことです。ややこしい文字が読めなくて、主人がいてくれたらなと思いましたが、「六角堂池坊并門弟立花砂之物図」「寛文十三年猪飼三左衛門」と記してあるのはわかりました。（一六七三年と、私の持っている手帳の池坊略譜のものっています）。表紙は虫食いですが、中は色鮮やかで、いま彩色したばかりのような美しい立花図です。池坊中央研修学院や、「いけばなの古書を読む会」で知った専好や、その有名な門弟の作品がたくさんっています。寫しだとしても、どのようにこれを作られたのか、どうしてこんなところにあるのか、たいへん興味をそそられました。

翌朝、その先生と村人の案内で、西方院御夫妻は、法華院の山へのほられました。主人が西方院様に「寺へ唐招提寺」の若い者は誰もここを知らないのです。是非、今度は一緒に行こう」と言っていたのです。私とまさえさんは、足元が危ないということで（主人からも「お前の足では無理」と言われていました）、迷惑をかけてはと

遠慮しました。山にのぼった智円様の話では、堂はくずれ落ち、足元には朽ちた梁や柱がころがり、目印の碑もコンクリートで、僅か「唐」の字だけが残っているに過ぎない。ただ「山に関係なきものは入るべからず」の立札があったそうです。行きは、案内の人が草を刈り倒しながらだったそうですが、帰りは、反対側の道から林道に出て、戻ってきたと言われました。

その林道は立派に舗装されていて、車で私たちを乗せて走ってくださいました。「この杉山も寺領、ここも寺領……」寺領は相当広い面積であるようです。この山際には、はじめてみる蔓草、白くて内側に古代紫の紋様がみえる花が、ひっそりと咲いていました。お医者さんのおうちで調べると「ツリガネカズラ」というのです。法華院は、この林道から行くのがたやすいということがわかったそうです。

この寺を建立されたのはへ唐招提寺前長老・北川～智泉へちかい～和上様、当時は相当奥深いところで、どんなに大変だったことでしょうに。ほんとうに時代はかわりました。

帰り道で室生村の向瀬へむこうじ～を通りますので、その正定寺に寄りました。へ同寺の～東森へ善城～様には、主人の命日に墓参りしていただきましたので、お礼を申し上げたいと思っておりました。奥様は、私の手をとって涙してくださいました。主人と共に訪れた日のことが、どうと魅ってまいりました。それは昭和五十八年、大野寺や磨崖仏へ先におまいりしてからでした。タクシーの中で、学生時代の頃や、戦後まもなくこの道を歩いた時のことを、よく話してくれた主人でした。お茶をいただきながら、東森様と楽しげな話しあいが続きました。あの時お庭の大きなうめもどきが、見事に真赤な実をつけていました。十一月でした。そのうめもど

き、今年はまだ時期が早かったようです。

東森様は、檀家まいりをして、今帰ってきたばかりと言われ、お元氣そうに見えましたが、奥様の話では、少し弱っていらっしやるとのこと、気になります。おだいじにしてほしいと思います。

主人の書いた「諸悪莫作……」の軸の横に、

「兜岳重くそびえて夕かげのふかき溪より雲湧きやまず 香落溪唐招提寺別院にて 憲雄」

先生が書かれたお軸をかかげてくださいました。主人と一緒に行かれた時のものだとお聞きしました。ほんとうに「めぐりあい」です。その時はどんな様子だったのでしよう、いろいろと想像しています。

話は前後しますが、兜岳をはじめ、鎧岳、屏風岩、俱留尊へくろそ山などの山々に囲まれた曾爾高原、伝説で知られているお亀池のある広大なススキ原まで車で行きました。銀色のススキの穂が風にゆれるその中でのおにぎりのとてもおいしかったこと。

その上、そこに見える亀山（海拔八五一メートル）へ登ることになったのです。若草山よりは少し高いでしょうか。道は急なようです。躊躇する私を励ましてくださって、少し緩やかな方の道を選びました。小柄なキリン草の黄色い穂は、五、六センチくらい、ナデシコやヨメナの花の色も冴えていました。智円様が、杖にする棒ぎれを拾ってくださいました。奥様は先発で道案内、智円様は私と前後しながら、まさえさんはいつもいちばん後から、歩きにくいについてくれました。

やっと頂上、そこに立っての眺めは、下で見るのとは趣が違います。近くの個性的な山々、遠くにかすむ山な

み、ススキの大草原、山あいに見える黄金色の田んぼや小さな家、それに澄みきった広い空、こんな壮大な眺めが奈良県の宇陀の山奥にあったとは……。かつて小学校に勤めていた頃、「曾爾はいい」と耳にしていました。目の前に広がる豊かな大自然の美しさ、もう、ほんとうに「すばらしい」の一言に尽きます。くだりは、危っかしい私の足どりに、智円様は気を配りながら導いてくださいました。急な坂道にはロープがはられ、それをもつて後向きに降ります。出口にできましたら「関所亀山裏登山口（冒険の森）」と書いてあるので驚きました。反対にここから登るのでしたら、この立札を見ただけでもう止めてしまったことでしょう。

最近すこし足を痛めている私が、六十五歳になって、主人がいないのに、こうした山登りができるとは、思いもよらなかつたことです。どうしたことか、帰ったあと、どこも痛みません。ほんとうに西方院様はじめ皆様のおかげで、有難いことです。仏様が守ってくださいだったので。

すきとおるような、清らかな空気を思いっきり吸い、よく歩き、よく見、多くの方々にめぐりあい、充実した二日間の旅でした。いま思うと、夢のような気が致します。そして、これから元気に生きていこうという力が湧いてきたように思う私です。

思いがけなく長い便りになりました。正定寺で先生のお歌を見せていただいて、主人と行かれた奥香落、そこへ私も連れていただきましたので、お知らせしたくなつたのです。ご判読くださいませ。

（※右は、赤谷明海夫人紀美子さんが原田憲雄・慶にあてられた私信だが、許しを得て、掲載する。）内は、編集者の加えた注で、蛇足の気味もあるが、第三者にはあるいは参考になろうか。一九九〇・三・原田憲雄

真山民の詩

1989. 10. 15. 原田憲雄

真山民は一三世紀後半の中国、すなわち宋代の末から元代の初めにかけて、隱者として世を送った人らしい。宋の大儒真徳秀の子孫だとする説があるが、よくは分からず、「山民」も実名なのか、号なのかはつきりしない。わたしはこの人の詩が好きで、一九六〇年『大乘』という雑誌に紹介文と翻訳二首をのせた。和刻本も三、四種類集めたが、人に勧めるとき進呈し、いま手許にあるのは『和刻本・漢詩集成』に収めるものだけだ。偶然ひらいて拾い読みをしているうちになつかしくなり、そのいくつかを翻訳した。

夏の夕べ

砂原の路が尽きたとき

大江の空は夕陽を帯びていた

風に吹かれて蟬の声はおちつかず

水鳥と影が同時に飛びたった

さっぱりと黒い藤の杖

ばさばさ白い麻のじんべ

釣り糸たれている人に呼びかける

岩場を半分わけてくれますか

夏晚江行

行尽沙頭路

江空帶夕暉

風蟬聲不定

水鳥影同飛

蕭散烏藤杖

輕鬆白紵衣

試呼垂釣者

分我半苔磯



峴山亭

すずしい風が入りにくい

どうぞすだれはおろさないで

ここならどこでも暑くないのに

ひとは雑踏にゆきたがる

千里の水に 竹の色

軒べの松に 秋の声

こういうしずかな趣きは

たんのうしても飲ほけじやない

旅の夜

ひとりぼっちは味気ない

ましてさびしい旅の夜

屋根が低くて月見えす

障子は破れて風うたう

すると隣で笛三ふし

物見の槽で鼓二こえ

峴山亭避暑

怕礙清風入

叮寧莫下簾

地皆堪避暑

人自要趨炎

竹色水千頃

松声秋四檐

此中有幽致

多取未傷廉

三山旅夜

独坐本無況

淒涼更旅中

屋低檐礙月

窓破紙吟風

隣館笛三弄

謹樓鼓二通

うれしいね 一杯やろう  
さかなは荔枝のあかい実さ

船とまり

日の暮れて片帆おろせば  
小湊にたつ夕けむり  
かもめらと渚を分けて  
月むかへともによどれば  
いさり舟ともしび暗く  
波のこゑ枕にひびく  
遠きひと恋しせつなし  
ましてまた啼くほととぎす

草

草は枯れても根は死なず  
春になったら花がさく  
わたしの胸の愁いの根  
春でもないのにまた生える

半鰯聊自遣

新荔枝輕紅

泊白沙渡

日暮片帆落

渡頭生暝煙

与鷗分渚泊

邀月共船眠

燈影漁舟外

灘声客枕辺

離懷正無奈

況復聽啼鷗

草

草枯根不死

春到又敷采

独有愁根在

非春亦自生

古い『開運暦』というのが本の間から出てきた。雑誌の付録についていたもので、すっかり忘れていた。捨てようと思つてちよつと開けてみたら、姓名判断というのが書いてあった。文字の画数だとか名まえの音だとか、いろいろ書いてある。そういえば、最近、大きな樹だけ伐ってもらうのに頼んだ植木屋さんからの著中見舞いに、名まえが変つていたことがあつた。何か気になることがあつて、変えたのだろうか。戸籍は、よほどの理由がないと変えることはできないが、日常使う名まえを変えても差しつかえはないし、よくない名まえは実際に使わなければ、戸籍は変えなくても運命は開けるのだと書いてある。植木屋さんは、まだ結婚していない人だから、名まえを変えて何かがよくなるのならそれも結構なことだと思う。

学校時代の友達が、結婚して姓が變つたために、氏名の文字の画数が少なすぎるからと、画数の多い漢字に變えたことがあつた。わたしはそんなことはしなくても、以前のままでよいと言つて、手紙などの宛名にもとどおりの文字を書いて出した。それで、その友達は、葉書をくれても、自分の名まえを書かず名無しのごんべえさんだった。わたしは書き忘れたものと思つていたが、それほどこだわっていたのかと後になって思つた。せつかくだったのに、わたしもその文字を書けばよかった、そのうちにその人とはつきあうこともなくなつてしまつた。吉本ばななさんは、どうしてこんな名まえなのかと思つていた。どんな親でも自分の子どもにそんな手あたり次第の名まえをつけることはない。お父さんの隆明氏はどういう考えがあつて「ばなな」にしたのかと、他人の

ことだのに考えていた。あるとき、新聞を見ていたら、ペンネームだと書いてあった。はななさんは、バナナの花が好きなので、自分で「はなな」とつけたという。ペンネームならバナナでもバイナッブルでもいいはずだ、と思っていたら、はななさんは、今度「バイナップリン」という随筆集を出したという。ほんとうに何でもやってしまう人だと感心した。

わたしの行くパーマ屋さんの奥さんは「ことみ」という名まえである。美容師さん達は「ことみ先生」と呼んでいる。女優の石田あゆみという人と似ていて美人である。住み込みの見習いから仕込まれた人で、大先生の息子さん、現在の経営者と結婚して若先生になった。色が白くほっそりとして、竹久夢二の絵にあるような風情だが、今は経営者だからしつかりと若い人を指揮してリーダーシップをとっている。

パーマ屋さんなどというと、白いエプロンをした髪結いさんを想像してしまうけれど、なかなか第一級の美容院で、正面は鋼鉄のように光ったタイル張り、入り口はタイムトンネルをイメージしたかのようなガラス張りの不思議な円形をくぐる。中の鏡がまた、鉛の滴をぼとんと落して大急ぎで鏡板を押しつけたシユールの親玉みたいなのが壁に取り付けてある。初めての人はちょっとどつきりする設計なのである。わたしはその「若先生」の名まえを、どんな文字を書いたのかと考えてみた。「琴美」「小登美」あて字ばかりで意味がない、これでは芸者さんみたいで駄目だなあと、髪をまいてもらいながら思っていた。そのうちに忘れてしまっていたが、ずっとたつてから別の時に、やっぱりパーマをかけてもらいながら何げなく壁を見ると、鏡と鏡の間に「パーマデザインの入賞作品が、美人のモデルで写真にして貼りつけてあった。その作者を「小富」と書いてあったのだが、わたしは

何とも思わずに眺めていた。細いプラスチックの棒に髪をすっかり巻きつけて、次に蒸し器のような大きなケースを頭にかぶせられてから、ふと思ひ出した。「小富」つまり「ことみ」だったのだ。何だかおばあさんの名まえを頂いたような感じだなあと少しがっかりした。

パーマメントに行くたびにそれを思い出して「小富さんなんてかわいくも美しくもない」と思っていた。ところが何年かしてその人も三人の子どもを持ち、長男は中学生になった。そのとき、わたしは突然、なっとくした。そう幾度もパーマメントに行くわけではないから、彼女に出会うのは年に三回か四回なので、そのたびに変わり様が見られる。わたしが初めてこの店に行った頃には、学校を卒業したばかりの、いちばん若い見習いさんで、大先生に注意されながら、はい、はい、と返事して仕事をしていた。大勢いた美容師の中からこの人が残ったのである。いまはなんと自信を持って、あたりに気を配りながら、うまく仕事を進めていることだろう。この人を見ると、あせらずに、ねばり強く、淡々と積み上げてゆくことの大切さを感じさせられる。さすが「小富さん」あまり欲ばらないところが一層よい。

わたしは自分の名まえをそれほど好きだとは思わないが、親がつけてくれたのだから有難いと思っている。ただ自分の名まえが呼ばれることはめったにないので、ふだんは忘れている。文字も名まえのようには読めないよ。うだから、たずねられると、慶応のけいですとか、慶賀のけい、よろこぶという字ですとか言ってしまう。それ以上の説明が必要なこともあまりない。高校生のときに、英語の先生が、慶は何と読みますか、けいですか、よしですか、とたずねられた。「めぐみです」と答えると「ほう、それはきつと御両親が天からめぐまれた子だ

とよろこんでつけられたのでしょう」と言われたので、みんながアハハと笑った。なるほどそうかもしれないと思つてわたしも笑つた。その親心に報いるほどにわたしは英語がよくできなかつた。また中学生のとき、わたしの家の近くに中学校の農場があり、わたしたちは時々そこへ作業に來た。そろそろと行列が家の横の道を通つていたときに、男の子がふと思いついて担任の先生に言つた。

「先生、めぐみは、なんにもめぐんでくれよらんわ」

そこで先生はすかさず、

「あのめぐみは、めぐんでもらう方のめぐみやろ」

わたしは近くにいなかつたのでそんなことは知らなかつたけれど、ちやうど道のそばの台所にいた母がなかで聞いていて、おかしくて笑いをこらえるのに苦労したといつていた。わたしもその時はおもしろくて笑つたのだけれど、今になって考えてみると、ほんとうによく当たつていたと思う。親、兄弟、友達……：たぐさんの人々からめぐんでもらつてやつと今まで生きてきた。だが、そういうふうと考えてきたらうか、神や仏がまつたく別のところにおられるものだと思つていなかつただろうか。曆をすこし読んでみたら、わたしの名まえにはよいことが何もなかつた。何もないからたくさんめぐまれてきたのかと思う。できるだけ自分の幸いを忘れないようにしよう。捨てようとおもつた曆だけれど、またもとのとおり本の間に入れた。

嵯峨野の秋の彩りの一つとして野宮（のみや）神社の竹祭りがある。天龍寺の横の細い道に入って野宮に行こうとして、竹みこしの行列に出あった。新しい空色のはっぴを着た子ども達が担いで、赤い袴の巫女さんも歩いてきた。竹祭りとはどういう祭りなのかと思つて、神社でお守りを売っている若い人にたずねてみた。

この祭りは、昭和五十九年から始められたもので、まだ新しい祭りである。嵯峨野の美しい竹林を大切にしようという気持から行われるようになり、みこしを担いでいたのは少年野球団の子どもだということだった。

嵯峨野についての昭和三十六年発行の案内書を読むと、

嵯峨野を表徴するものは、静かで美しい竹林とその中を縦横に縫つてつづく清らかな道である。薄暗い竹林を出はずれた明るい路傍には、次に訪れようとするコースを指示してくれる古風な道しるべが立っている。

と書いてあるが、わたしがこの地を一人で歩いたのはそれより少し前の三十年頃だった。土地の人より外に見かける人もなく、どこへ入り込んでも物音もなかった。祇王寺の小さな門も、今ではくぐることはできないが、その頃にはさえぎるものもなく深閑として、かすかな音をたてることもはばかられた。歩いてくる道には、竹やぶや雑木林にかこまれて美しい畑がひろがり、どこか清々しきを感じさせる里だった。澄んだ水のはしる細い流れにはピンクのミソソバがたくさん花を咲かせていることもあり、草を焼く煙が山裾をはっていい香りを放っていたりした。今では畑がなくなり、大きな家が建ち、道の両側はほとんど土産物店や料理屋が並んでいる。それでもわたしが嵯峨野を思うときには、三十何年か以前の様子のままである。遠くを見ることができたから全体の図が描きやすく、記憶することも少なくとも少なくてすんだ。わたしは嵯峨野の歴史や文学を知つて歩いたのではなくて、

ただこの土地が好きなたけだった。

嵯峨の竹林がもっともよく保存されているのが野宮神社のあたりだそうである。竹のトンネルとして観光コースに入っているのは、神社の前を東へ、山陰線を横切ったすぐ三十メートルほどの道であり、神社の横から北へ、大河内山荘に通じる道も竹林の中である。しかし大塚五朗著『京都風土記』によると、昭和十五年頃の嵯峨野の竹林は、アクセサリーのような竹のトンネルではなかったようである。

野宮を囲む竹林のふかき、豊かき。その竹林の中を縫うて流れる幾筋かの道のかそけき。薄く残っている残雪に竹林を透かして漏れる陽筋がさむさむと縞を描いて美しい。陽筋を受けた竹の瑞々しさは玲瓏として碧玉のように澄み徹り、陽筋を受けない半面は緑青色に冴えかえる。しんとしずかな道は涯もなく続いている。私の歩みもいつか音をしのばせる。

春には数多の筍が轟々（ちくちく）として、躍動する生命を空に噴水させ、夏にはあの美しい斑（ふ）入りの皮が錯落として大地に美しい模様を織り出すこの竹林も、冬は寂然として僅かに風の音を宿しているのみである。

読んでいてもその静かさが伝わってきて、竹林の中に一人で立っているように感じる。さらに筆者はこの静けさを破るかのようになり、ふと小石を拾って竹林に投げ込んでみる。

：投げ込まれた石は幹から幹に、かあん——かん、かん、かあん、と撥ね返って遙かに飛び去った。そしてその戛然たる金属性の音は笈の輪を描いて深々と消えてゆく。



この頃を知っている人には、今の嵯峨野はあまりにも無残だろうとおもう。竹祭りの竹みこしを造った人は、六十九歳の竹細工師、松田正三さんと新聞に出ていた。昭和十五年には二十歳だったことになる。戦争に行かれたことだろうが、戦後の嵯峨野をずっと見てこられてどんな気持ちだったろうか。竹みこしは野宮あたりの真竹を使い、全長六メートル、幅、高さともに一メートル、竹を削って屋根をふき、竹を組んで鳥居も作ったということである。

野宮神社には若い人が大勢つめかけている。竹祭りだからというのではなくて、旅の人らしい。ずいぶん種類の多いお守りが売られているが、この小さい神社にはたくさんの神様がおられるのである。野宮大神（天照大神）いざなぎのみこと、大山咋神、応神天皇、それに新しく稱荷大明神、弁財天、大黒天、竜神様。それぞれの神様が、健康、知恵、家内安全、縁結び、安産などを受け持っておられる。若い人達はそれほど御守りを買っている様子はなくて、絵馬を掛けたり、奉納木に願いごとを書いたりしている。信仰などというよりも、楽しい遊びのように見える。他の処でなら書けないような、ひそかな願いごとを平然と書くことが許される場所、穴を掘って「王様の耳はロバの耳」と言った散髪屋さんほどではなくても、言ってみたかっことをやっど割り箸のような奉納木に書いて、その山のように積まれている中に忍び込ませた人もいるかもしれない。十一月二十三日はお火焚祭り（願いごと成就の祈願祭）と神社の行事の中に書かれているから、絵馬や奉納木が燃やされるのだろう。そんな筋書きを考えながら若い人を眺めているのは、やはり意地の悪いことだろうか。

縁結びの大黒さんに人気があるのもあたりまえだが、小さな祠の左右に大黒天の面が掛けてあり、その前に、

「神石をさすると願いごとが達成されると言われています」と立札がしてあって、すぐ下の亀石という黒い亀の甲のようなのがそれである。三人連れの女性が思い違いをして、大黒さんの顔を撫でていたので、わたしは「この石を撫でるのですよ」と教えた。若いひとは「ああまちがえた」といって亀石を撫でたが、その後で若いカッブルが、やはり大黒さんの顔をていねいに撫でていた。びんずるさんと同じに思っているのだろうか、どれでもそれほどの違いはないだろう。大黒さんはくすぐったそうに笑っている。仲のよい二人なのにそのうえ縁結びを祈るといふのも、恋人達の不安は限りないものなのか、楽しんでいるだけなのか。

奉納された謡曲の目録を見ると、昭和二十九年から六十一年までのものが一枚もない。このことは野宮神社の有り様を語っているのだろう。長い間、忘れられたようにひっそりした野の神社だった。鳥居も一時はほんの形だけのものになっていた。この神社では黒木の鳥居といって、イチイなどの原木を使うのだそうである。最近では適当な木がなかなか見つからないので、現在のもものは、九州でイチイの木の型をとり、長く保つように黒木を模した石造りになっている。

野宮は、伊勢神宮の齋宮として向かわれる未婚の皇女が、潔斎の一ケ年を過ごされた御屋（みや）の遺蹟で、その齋宮を営まれたのは、嵯峨の地が多く、場所はきまっていなかった。いまの野宮神社は、その齋宮の名残をもっともよく残している地の一つであると言われている。中でも、古い綱のかかったつるべ井戸は石組が古く磨りへって、この地の歴史をしのばせる。

謡曲の野宮も源氏物語に拠っている。物語の中に、六条御息所が、自分の娘が齋宮となって伊勢神宮へ向かう

のに同行しようとしている時に、野宮へ光源氏が訪れるところがある。与謝野晶子の訳によるとその場面は、

町を離れて広い野に出た時から、源氏は身に沁むものを覚えた。もう秋草の花はみな衰えてしまつて、かれがれに鳴く虫の声と松風の音が混じり合い、その中をよく耳を澄まさないでは聞かれないほどの楽音が野宮の方から流れてくるのであつた。：野宮は簡素な小柴垣を大垣にして連ねた質素な構えである。丸木の鳥居などはさすがに神々しくて、なんとなく神の奉仕者以外の者はずかしく思わせた。……

とあり、松風の音が強調されているところを見ると、今の野宮あたりではないのかもしれない。平安朝の初め頃は、どの範囲までを嵯峨野としたのかはつきりしないそうで、およそ、東は太秦、西は小倉山まで、北は北嵯峨の山麓から、南は大堰川の流れまでを境界とした、平坦な沃野を、嵯峨野と呼んだらしいということだから、この物語の描写からは、もう少し太秦寄りの土地に斎宮が営まれたことになるのだろうか。

観光客用の赤い自転車で、人の中を猛スピードで走り抜けてみせる若者もあるが、あのような若さもわたしにはなつかしい。昔の嵯峨野もよかつたけれど、人が列をなして歌声が流れてくるような嵯峨野もいい。どこまでも急いでこれ以上に見せてしまおうとしないで、訪れる人が、嵯峨野のよさを自分で見つけるように、そつとしておいたらもつといい。若い人はじつと立ち止まっているのが嫌いで、おもしろいものを探してどこまでも行くこととする。そのためにはいま、野宮はなくてはならない夢の入り口だし、祇王や仏御前はロマンの媒介者なのだろう。

わたしは野宮を出て釈迦堂まで行つてみた。が、こちらには若い人は少なく、本堂の釈迦如来の前にはだれも

いなかった。少しして、一人、二人、また一人と入ってきたけれど、みんなわたしと同じくらいで、にぎやかな年齢を通り過ぎ、やっとここまでのとりついたような人ばかりだった。竹みこしを担いだ子ども達は、その頃とこを歩いていたのだろう。出て行くのを見たりで、ふたたび姿を見なかった。翌日の新聞を見ると、小さく、「子供たちが元気に担ぐ竹みこしが約二時間、秋色の行楽地を進んだ」と書いてあった。

※前号正誤 第一〇一号 一二頁七行 一年以上↓二年以上(ト原淳道氏の示教による)

第一〇四号 二二頁七行 得ねしたい↓お尋ねしたい

疑いの網 一法華経巡礼 371 1989.10.17. 原田憲雄

3-3. 疑いはすべて除かれ、わたしはいま涅槃を得ました、雷のようなお声を聞き、

諸天と共なる世界の前で、無上道に到達すると授記されたとき。(14)

わたしは強烈な恐怖におちいりました、はじめ導師の呼びかけを聞いたとき、

悪魔が地上に仏の姿を現わして、わたしを悩乱しようとするのかと。(15)

原因や理由、幾千万、幾百万の譬喩によって、最善の仏の悟りが、

示され、確立されたとき、渴えは無くなりました、その法を聞いて。(16)

またあなたがわたしに称讃されたとき、幾千万億の仏たち、涅槃に入った過去のジナたち、  
かれらによってこの法が、たくみな方便で説かれたのだと。(17)

さては未来のあまたの仏、また第一義を見る人として現に世界におられる方が、  
たくみな方便の幾百で、未来にも、また現在も、法を説くのを。(18)

あなた自身がどのような修行をし、どのような法輪をさとり、

法の説示を確立したかを、みずから称揚されたとき、(19)

そのとき分った、これは決して悪魔ではない、世界の保護者は真実の行を示された、

ここには悪魔の入る隙はない、わたしは疑いの網におちていたのだ。(20)

甘美で、ふかく、魅力のある、仏の声を聞いたとき、わたしには喜び生まれ、

すべての疑惑は消滅し、ためらいはなくなって、まことの智慧に安住した。(21)

わたしはかならず如来となり、天と共なるこの世界で、尊敬せられ、

仏の覺りをことばにふくめ説くでしょう、多くのボサツを導くために。(22)

*vyapanīta sarvāni mi manyitāni śrutvā ca ghoṣam aham adya nirvṛtaḥ /*

*yadā pi vyākurvāsi agra-bōdhau purato hi lokasya sadevakasya // 14 //*

*balavaḥ ca āsīn mama chaṃbhitatvaṃ prathamam giram śrutva vināyakasya /*

*mā haiva māro sa bhaved vihethako abhinirminitvā bhūvi buddhavesaṃ // 15 //*

yadā tu hetūhi ca kārapais ca dr̥stānta-koti-nayutais ca dar̥sitā /  
 supariśhitā sā vara-buddha-bodhis tato 'smi niskāṅksu śruṇitva dharmam #16#  
 yadā ca me buddha-sahasra-koṭyah kīrtesy atītān parinirvṛtāñ jīmān /  
 yathā ca tair deśitu esa dharmā upāya-kausālyā pratiśthihitvā #17#  
 anāgatās co bahu-buddha-loke tiśhanti ye co paramārtha-darśinah /  
 upāya-kausālyā-śatais ca dharmam nidarśayisyanty atha deśayanti ca #18#  
 yadā ca te ātmāna yādṛśī carī abhiniskramitvā(W: abhiniskramātā) prahṛtīya samstutā /  
 buddham ca te yādṛśu dharmā-cakram yathā ca te 'vasthita dharmā-deśanā #19#  
 tatas ca jānāmi na esa māro bhūtām carim darśayi loka-nāthah /  
 na hy atra mārāṇa gatiha(W: gati hi) vidyate mamaiva cittaṃ vicikitsa-prāptam #20#  
 yadā tu madhureṇa ṣabhīra-valgunā samharsito buddha-suvareṇa cāham /  
 tadā mi vidhvamsita sarva-saṃśayā vicikotsa nastā ca sthito 'smi jñāne #21#  
 nihisaṃśayam bhesyi tathāgato 'ham puras-kṛto loki sadevakesmin /  
 saṃdhāya vaksye imu buddha-bodhiṃ samādapento bahu-bodhisattvān #22#

これは前号3-2.の偈の続きである。あわせて(1)で説明する。

(1)(2)は、この偈全体の要約である。長老シャーリプトラは「汚れの尽きた」人だが、ここでは衆生の

「渴望」を、衆生に代って背負う人となっている。かれはしかし、衆生に代って背負っているのだという自覚はなく、おのれのものだと思ひこんでいる。その渴望には二つの顔があつて、ロゴスの面が「疑問」であり、パトスの面が「悩み」なのだ。疑問は二つに大別され、その一つが、(3)から(13)にかけて展開し、二つは、(14)から(20)にかけて展開する。そうして、二つの疑問の解決が、(21) (22)で歌われ、この偈は収束する。

「無上の乗」とは、最高の悟りに到るべき優れた乗物の意で、「方便品」で説かれた「一乗」であり、「仏乗」であり「無上道」である。「三十二相」とは、仏の身体にそなわる三十二の優れた特徴をいう。頭上に肉髻があり、眉間に白い巻き毛があり、皮膚が滑らかで黄金色をしている、等々で、その一々については經典によつて異説がある。今のわれわれからするとグロテスクなものもあるが、古代のインド人が理想的と考えた人間の身体的特徴を集成したもの、と考えられよう。ジャイナ教でいうジナの身体的特徴ともかなり合致する。これと並んで副次的な特徴を、八〇数え上げ、八十種好、または八十随好といい、三十二相と八十種好を合わせて「相好(そうごう)」という。仏像が製作され始めると、その基準となつた。相好の身体的であるのに対し、精神的特徴を「十八不共法(じゅうはちふぐほう)」という。

これらの特徴は、仏に、あるいは仏にのみ、そなわるといふが、「仏」そのものが固定した存在ではない。人が、覺つて「仏」なる状態に近付くとき、身体に、精神にそのような特徴が発現するのだ。平凡なわれわれでも、はっきり目標をもち、いっしんに歩いているときには、顔色はかがやき、心もはれやかで、見る人にとつても好

もしく楽しいだろう。大乘經典の言葉は、いっばんに神秘的・神話的であつて、そこで語られる仏は、われわれの日常の体験や表現から離れすぎる。だがその表現は、常識的なわれわれが陥りやすい偏見を打破するために、ことさら奇異な言葉を選んでるのであつて、仏界とわれわれの世界は、切り離されたふたつのものではない。

シャーリプトラは、かつては仏とほとんど同じ相好をそなえていたのであろう。あるいはそなえているとみずから信じていたのであろう。けれども、疑いの網に落ち込んだとき、金色にかがやく肌は色あせ、眼の光りも失せ、心は飢え、渴えたのだ。(5)の「散乱」と(8)の「落ちこぼれ」とは、梵文では同じ *hrastā* の訳語で、「落下する」とか「散乱する」とかいうほどの意である。疑いの網への落下と、相好の散乱とが、二つの面に分れて現れても、もとは一つの渴望である消息を、この語法はよく示している。

釈尊の弟子となる前のシャーリプトラが、バラモンの徒に尊敬される遊行者だったことを述べるのは『法華経』ではここが初めてである。人は最初に身につけた習慣から抜け出しにくい。かれもまた釈尊の教えによって、古い考えを洗い落していったが、それでもおのれの信念を曲げようとしなかったことを、南伝の經典が記しとどめている。「涅槃」について、かれの思い込みと師の教えとにズレがなかったとはいえない。かれの第一の疑問はそこにかかわる。眞実は、つねに眞実としてわれわれの前に現れるわけではない。むしろ常識をさかなでし、習慣となつた感性をたたきつぶす。眞実は、悪魔のようにやってくるのだ。その「悪魔」のうちに眞実を見出す道は困難をきわめるだろう。これがシャーリプトラのぶつかった第二の疑問である。二つの疑いの網におちて苦しみながらもシャーリプトラは、師の釈尊を信じ、その理路に従うことによつて、ついに疑網と苦惱から脱出した。